

親子ひろしま訪問団

令和6年度訪問の記録

令和6年（2024年）8月5日～7日



秦 野 市

～ 目 次 ～

は し が き	・・・・・・・・・・	P1
I 親子ひろしま訪問団		
1 訪問団の主なスケジュール	・・・・・・・・・・	P2
2 団員名簿	・・・・・・・・・・	P2
3 訪問の概要	・・・・・・・・・・	P3
4 訪問団員（参加者）の声	・・・・・・・・・・	P15
5 訪問団規約	・・・・・・・・・・	P23
II はだの平和の日のつどい	・・・・・・・・・・	P24
III 被爆アオギリ二世の植樹	・・・・・・・・・・	P24
IV 資 料		
1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文	・・・・・・・・・・	P25
2 広島市平和宣言	・・・・・・・・・・	P26
3 (広島)こども代表「平和への誓い」	・・・・・・・・・・	P29

は し が き

戦後50年を契機^{けいき}に始まった「親子ひろしま訪問団」は、今年で28回目を迎え、268名の親子が広島を訪問しました。

戦争を起こしたのも人間、傷つき立ち上がって生きるのも人間。ロシアによるウクライナ侵攻から2年以上が経過し、加えてイスラエルとイスラム組織ハマスとの戦闘など戦争、内戦、紛争^{ほうどう}がたびたび報道されている昨今、訪問団員10名にとって、平和記念資料館^{しりょう}の見学、平和記念式典への参列^{ひばく}、被爆体験談の聴講^{ちょうこう}などの経験^{けいけん}は、人間が起こす戦争の最悪の結果を知り、平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

また、訪問終了後には、訪問団が被爆地^{ひばくち}ヒロシマで感じ、学んできたことを広く市民へ継承^{けいしょう}していくため、8月17日に「はだの平和の日のつどい」を開催^{かいさい}し、活動報告^{ほうこく}を行いました。訪問団員の生の声が、会場の多くの人々の心に届いた^{とど}と思います。

本市では、核兵器廃絶^{かくへいきはいぜつ}、非核三原則^{ひかくさんげんそく}の堅持^{けんじ}、恒久平和^{こうきゅうへいわ}を柱とした「平和都市宣言^{せんげん}」を定め、また、広島^{およ}及び長崎^{ながさき}両市が主導^{しゅどう}する「日本非核宣言自治体協議会^{ひかくせんげん}」や「平和首長会議^{かめい}」に加盟し、平和への思いを発信しています。

平成20年6月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊^{とうと}さを考える機会として、8月15日を「平和の日」^{せいてい}と制定しました。毎年「平和の日」に近い日程^{にっけい}で、市民を主体とした様々な平和事業を展開しています。

また、平成21年8月には、市内事業所の協力を得て、市役所に「平和の灯^{ともしび}モニュメント」を、自治体としては全国で14か所目、神奈川県内では初めて設置^{せっち}しました。このモニュメントの種火^{たねび}は、同年の「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火^{さいか}し持ち帰った炎^{ほのお}を、「平和のシンボル」としてともし続けています。

今年、訪問団が広島市に届けた千羽鶴^{とど せんばづる}はおよそ6万5千羽にもなりました。一羽一羽、平和を願いながら、丁寧^{ていねい}に折っていただいた多くの市民の皆様^{みなさま}に、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴^{せんばづる}の重さに、鶴^{つる}を折られた皆様^{みなさま}の思いを感じながら、心を込めて鶴^{つる}を捧げました。

平和記念式典への参列^{ひばく}や被爆体験談の聴講^{ちょうこう}などの貴重な経験^{きちよう けいけん}を含め、被爆地^{ひばく}広島で見聞きし学んだことを、団員一人ひとりが心に刻み込み、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継いでくれることを心から願います。

I 親子ひろしま訪問団

1 訪問団の主なスケジュール

日 時	項 目	内 容
7月19日(金) ① 午後2時30分～3時30分 ② 午後3時30分～4時	① 説明会	訪問日程等の説明、「はだの平和の日のつどい」での報告方法検討
	② 結団式 市長表敬	市長メッセージ・千羽鶴の受渡し 場所：秦野市役所本庁舎4階 議会第1会議室
8月5日(月) ～ 8月7日(水)	広島訪問	① 原爆の子の像へ千羽鶴を拝納 ② 広島平和記念資料館見学 ③ 平和記念式典参列 ④ 被爆体験聴講 ⑤ 平和記念公園内碑めぐり ⑥ とうろう流し ⑦ 宮島見学
8月17日(土) 午後5時～5時45分	はだの平和の日のつどい	訪問の活動報告 場所：メタックス体育館はだの（総合体育館）サブアリーナ

2 団員名簿

保護者 氏名	子ども 氏名	役 割
おくむら み か 奥村 美香	おくむら み づ き 奥村 美鶴稀 本町中3年	団 長
もり み ず き 森 瑞樹	もり ゆ づ き 森 優月 本町中2年	副団長
むらき まさゆき 村木 昌幸	むらき ひ な こ 村木 日向子 本町小6年	記 録
はらだ りゆうこ 原田 龍子	はらだ もえ か 原田 萌叶 末広小6年	会 計
きたむら みどり 北村 翠	きたむら つばさ 北村 翼 西小6年	監 事

3 訪問の概要^{がいよう}

(1) 訪問1日目・8月5日(月)

8:07 小田原駅出発

11:38 広島駅着

14:00 広島平和記念公園見学

千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げる

14:30 広島平和記念資料館見学



「原爆の子の像」の前で

原爆の子の像^{げんばく}

この像のモデル佐々木禎子氏は、2歳の時に爆心地から

1. 7キロメートルの自宅で被爆しました。足が速く、とても元気な子でしたが、小学6年生の時に原爆症を発症しました。入院中、鶴を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けましたが、中学校に入学できずに亡くなりました。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられました。



平和な未来へ夢を託す少女の像

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、この子どもたちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られた鐘を寄贈しました。その鐘の下に金色の折り鶴がつるされ、風鈴式に音が出るようになっています。この鐘と金色の折り鶴は平成15年に複製されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されています。



市民から寄せられた千羽鶴の拝納

訪問団は、広島到着後、市民から託された千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に捧げました。平和記念公園には世界中から大勢の人々が集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が捧げられていました。

平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の繁華街でした。しかし、爆心地に近かったため、原爆投下により壊滅しました。

その後、昭和29年（1954年）に平和を祈念し、建築家の丹下健三氏の手により公園として生まれ変わりました。

園内には平和記念資料館をはじめ、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されています。

毎年、原爆が投下された8月6日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）」が開催され、夜には元安川をはじめ市内六つの川で犠牲者を慰霊する「とろう流し」が行われています。

平成28年5月には、バラク・オバマ元大統領がアメリカ合衆国大統領として初めて訪れ、原爆死没者慰霊碑の前で、核兵器なき世界の実現へ向けた思いをスピーチしました。

昨年5月にはG7広島サミットが開催され、G7首脳が原爆死没者慰霊碑への献花や公園内で被爆桜（ソメイヨシノ）の植樹を行いました。

平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の実相を伝え、核兵器のない平和な世界の実現に貢献するために昭和30年（1955年）に開設されました。本資料館は、「導入展示」、「核兵器の危険性」、「広島のみち」の3つのゾーンに分けて展示している東館と被爆の実相を「8月6日の惨状」と「被爆者」の2つのゾーンに分けて展示している本館の二つの建物からなります。

本館で目を引いたのは原爆投下前後の広島市内の様子をプロジェクションマッピングで見ることのできる展示で、原爆が落とされて、一瞬で美しい広島が焼け野原になってしまった様子を見ることができます。亡くなった人が約14万人もいたことを知り、それだけ多くの人々が亡くなられた上、被爆されて今も苦労されている方々も多くいらっしゃることを知りました。そのほか、8月6日の原爆投下以後の惨状の展示がされており、原爆で負傷した痛々しい姿の少女や人影が残る石など、被爆の実相を伝える展示が続きます。



平和資料館を見学する団員

(2) 訪問2日目・8月6日(火)

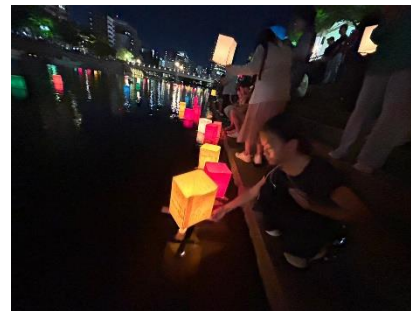
8:00 原爆死没者慰霊式並びに

平和祈念式参列

10:00 被爆者体験談の聴講

14:30 平和記念公園内の碑めぐり

20:30 とうろう流し



それぞれの平和への思いを灯籠に込めた

げんばくしほつしゃいれいしきなら へいわきねんしき 原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年8月6日に、被爆者、政府、自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われています。

午前8時に開会し、松井一實広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿を原爆慰霊碑に納めました。



平和宣言を行う松井広島市長



平和記念式典に参列する団員たち

この1年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は5,079名。名簿搭載者の総数は34万4,306名に、名簿の数は128冊となりました。

原爆が投下された午前8時15分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにしました。訪問団は、初めて参列する式典の、テレビを通して見る様子とは異なる厳粛な雰囲気緊張しながら、参

列する多くの被爆者及び遺族とともに黙とうを捧げました。

黙とう後、松井一實広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信されました。

松井市長は平和宣言で、79年前の当時14歳の被爆者の訴えやNRT(核兵器不拡散条約)に触れ、各国に「世界中に「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。」と呼びかけるとともに、「広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと友好の輪を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、希望の輪を広げていただきたい。」と述べました。

子どもたちは、出席者の挨拶や同年代であることも代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いと、この貴重な経験を心に刻みました。

げんばくしほつしゃいれい ひ 原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の家形埴輪に似たデザインの碑で、中央の石室には原爆死没者名簿が納められています。碑の正面には、「安らかに眠ってください 過ちは繰返しませぬから」という言葉が刻み込まれています。この碑文には主語がありません。人類の誓いであるからです。



原爆死没者慰霊碑

この静かで短い言葉には、原爆死没者への哀悼と、戦争という過ちを二度と繰り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打ちます。原爆が投下された事実、また核兵器のない世界を実現する為に、みんなで語り継ぎ平和を訴え続けていきたいと思いました。

平和の灯

昭和39年（1964年）8月1日建立。当時、東京大学の教授だった丹下健三氏の設計により、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」や溶鉱炉などの全国の工場地帯から届けられた「産業の火」が、昭和20年（1945年）8月6日生まれの7名の女性により点火されました。

建立の目的は「水を求めてやまなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核の象徴です。

本市では、平成21年8月6日に、平和の象徴として、市役所本庁舎玄関横に「平和の灯モニュメント」を設置しました。同年の親子ひろしま訪問団がこの「平和の灯」から採火し持ち帰った火が、燃え続けています。

ひばく 被爆したアオギリ

爆心地から約1.5キロメートル離れた東白島町にあった当時の広島通信局の中庭に、3本のアオギリの木が植えられていました。

原爆^{げんぱく}の投下によって、熱線^{ねつせん}と爆風^{ばくふう}をともに受けた3本のアオギリは、枝葉が全て無くなり、爆心地^{ばくしんち}側の幹^この半分が焼け焦げました。

しかし、枯れ木^{かき}同然^{よくとし}だったアオギリは翌年^{きせきてき}の春、奇跡^{きせき}的に新芽^{すがた}を出し、その姿は、原爆^{げんぱく}投下と敗戦^{ひへい}によって疲弊^{ひへい}した人々の心に、生きる勇気と希望^{あた}を与えました。

昭和48年（1973年）、当時の中国郵政局^{ゆうせいきよく}（かつての通信局^{ていしんきよく}）の建替^{たてか}えに伴い^{ともな}、平和記念公園内の現在の場所に移植^{ひばく}されました。3本のうち1本は枯れてしまいましたが、この被爆^{ひばく}したアオギリの種子は国内外^{おく}に贈^{ひばく}られ、「被爆アオギリ2世」として大切に育てられています。

今年度は平和首長会議から被爆^{ひばく}アオギリ2世の苗木^{なえぎ}の受け取り、親子ひろしま訪問団^{しよくじゅ}の団員が通学する小中学校で植樹^{しよくじゅ}を行います。

被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師^{ますおかせいしち}の増岡清七氏^{ひばく}から被爆体験^{うかが}のお話を伺いました。増岡氏は、被爆^{ひばく}当時の状況^{じょうきよう}やその時の恐怖^{きょうふ}について子どもたちにも分かるよう丁寧^{ていねい}に話し、その言葉は、戦争^{げんぱく}そして原爆^{おそ}の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く^{うった}訴えかけました。

【被爆体験談（増岡清七氏のお話から抜粋）】

昭和20年（1945年）8月6日は、建物^{たてもの}疎開^{そかい}作業のため、約8,300名の中学生が作業をしていた。学徒動員令^{がくとどういんれい}により当時の中学生は、夏休みもなく工場等で作業や建物疎開^{そかい}に従事^{じゅうじ}することになっていた。

建物疎開^{そかい}とは、空襲^{くうしゅう}による火災^{えんしょう}の延焼^{えんしょう}を防ぎ、住民の避難場所^{ひなん}のために建物^{こわ}を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁^{けんちょう}や

市庁舎^{しちょうしゃ}周辺^{そかい}は建物疎開^{そかい}で空き地となっていた。当日、増岡氏^{ますおか}を含む3年生の半数の70名は、爆心地^{ばくしんち}から約1キロメートルの場所で、引率^{ひんそつ}の先生の話^おを聞いていた。

午前8時15分、突然^{とつぜん}、強い光が目に入り、左からの風で押し上げられ、地面にた

増岡清七氏（広島市在住）



爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。

戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、反核・平和を訴え続けている。

たきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ（光）ドン（音）・きのこ雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見渡すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だか分からないほどの形相だった。熱で剥がれた皮膚は、爪のところで止まり、とぐろを巻くように垂れ下がっていた。

増岡氏も左顔面や腕など皮膚が垂れ下がり、今もその痕が残る。何が起こったのか、どこが安全なのかも分からないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくない」一心で逃げた。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。

「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じること。広島市の市街が炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた防空壕には、人が重なり合い、あふれていた。

ひん死の状態、水や家族を求めていた。木陰でそのまま眠ってしまったところを翌日、救助隊の馬車で市外の民家の座敷に運ばれた。既に多くの人丸太のように横たわっていた。この時、初めて汚い布で患部を拭いたが、治療はされなかった。

翌日、汚い茶碗によそわれたお粥が1杯置かれたが、皮膚のうみで左目と口が開かず、食べるのに困った。皮膚が垂れ下がった左顔面や腕に太陽の光が当たると、針でチクチク刺されるような痛みが続いた。数日後、行方を必死で探してくれた父親と再会し、荷車に乗せられ親戚宅に行った。

その時は、増岡氏の体を気遣って教えられなかったが、自宅は全壊、母親は即死していたと、後に父親から伝えられた。療養のための旅行で留守にして死を免れた父親も翌年、増岡氏が15歳のときに亡くなった。恐らく、増岡氏の方を探するために原爆投下直後の広島市の街を歩いて回る中で、残留放射能を浴びてしまったためと思われる（入市被爆）。火葬する設備がなく、自分自身でだびに付した。既に兄は特攻隊員として沖縄で戦死しており、家族は姉と二人きりに



被爆体験談聴講

なってしまった。



増岡氏と一緒に昼食

学友たちも多くが原爆により亡くなったが、そのうちの一人の遺品が、平和記念資料館に展示されている。

被爆体験聴講後、増岡氏と一緒に食事を取りました。その間も子どもたちは増岡氏に質問をしたり、熱心に話を聞いていました。

原爆ドーム

後に「原爆ドーム」と呼ばれるこの建物は、大正4年（1915年）に広島県の物産品の販売促進を図る拠点として建設され、建設当時は「広島県物産陳列館」という名称でした。その後、「広島県産業奨励館」と改称されましたが、県内の物産品の展示・販売を行うほか、博物館、美術館としての役割も担っていました。

しかし、戦争が激しくなった昭和19年（1944年）3月、産業奨励館としての業務が廃止され、内務省中国・四国土木出張所や広島県地方材木・日本材木広島支社など統制会社の事務所として使用されていました。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ造り、石材とモルタルで外装が施されていました。全体は3階建てで、正面中央部分に5階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームが載っていました。

爆心地から約200メートルの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼しました。爆風がほとんど垂直に働いたため、本館中心部は奇跡的に倒壊を逃れたものの、館内にいた全ての人々は即死しています。

鉄骨部分がむき出しの残骸と化し、いつからともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、平成8年（1996年）に世界遺産へ登録されました。

静かにたたずむ原爆ドームの姿は、平和記念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問団に、同じような悲劇を繰り返してはいけないと



平和そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

改めて強く感じさせられました。

平和記念公園内の碑めぐり

平和記念公園^{およ}及びその周辺には、原爆犠牲者^{げんばくぎせいしや}の慰霊碑^{いれいひ}など50を超える原爆関連の記念碑や記念建造物があります。訪問団員は猛暑^{もうしょ}の中、それらのいくつかをじっくり見学し、戦争や原爆の恐ろしさを実感^{じっかん}しました。



ガイドの説明に聞き入る団員たち

被爆した墓石（慈仙寺跡の墓石）

当時、太田川^{おおたがわ}が元安川^{もとやすかわ}と本川に分かれるあたりは「慈仙寺の鼻」と呼ばれていましたが、それはここに慈仙寺という浄土宗^{じょうどしゅう}の大きなお寺があったからです。その慈仙寺は爆心地から約200mで、全ての建物は壊滅^{かいめつ}、住職^{じゅうしよく}ほか2名は清掃中に即死、浴室で洗濯中の住職の妻も重傷で翌日死亡し、結局全員が亡くなりました。

また、当時慈仙寺は中島国民^{こくみん}学校の分校^{がっこう ぶんぎょうじょう}場として利用され、通学していた十数人の低学年の児童も犠牲になりました。平和記念公園の中で、被爆当時の地面をそのままとどめているのは、この墓地だけです。公園が盛り土して建設されたため、周囲を石で囲んで、池の底のようになってしまったこの部分が当時の地面です。



被爆した墓石

(参考：『碑めぐり解説のしおり』被爆体験証言者交流の集い 編 広島平和記念資料館啓発課)

原爆供養塔

爆心地^{ばくしんち}に近いこの付近には、被爆後^{ひばく}、遺体^{いたい}が散乱^{さんらん}し、また、川から引き上げら

れたものなど、無数の遺体が運ばれ、だびに付されました。

昭和21年（1946年）、市民からの寄附により、仮供養塔、仮納骨堂、礼拝堂が建立され、その後、昭和30年（1955年）に、広島市が中心となり老朽化した納骨堂を改築し、各所に散在していた引き取り手のない遺骨もここに集め納めました。身内の見つからない遺骨や氏名の判明しない遺骨約7万柱が納められています。

毎年8月6日には、様々な宗教及び宗派合同の供養慰霊祭が営まれています。



原爆供養塔

韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約300万人の朝鮮人があり、数万人が広島市内で被爆したといわれています。

「死者の霊は亀の背に乗って昇天する」という故事にならって、亀を形取った台座の上に碑柱が建ち、その上に二つの竜を刻んだ冠が載せられています。

碑は、当初、軍人であった朝鮮王家の一族李殿下が司令部への出勤途中に原爆投下に遭い、その後発見された場所付近ということから、本川橋西詰めに建立されました。

その後、各方面からの強い要望により、平成11年（1999年）7月に平和記念公園内に移設されました。慰霊碑の石は、国に帰れなかった人々への思いから、ふるさと韓国の石が使われています。

昨年5月には韓国の尹錫悦大統領が岸田総理とともに慰霊碑に献花を行いました。



韓国人原爆犠牲者慰霊碑

どういんがくといれいとう 動員学徒慰霊塔

だいにじせかいたいせんちゅう ろうどうりよく ふそく おぎなう きんろう
第二次世界大戦中、労働力の不足を補うため、勤労
ほうし どういん せんか がくと げんぱく ぎせいしゃ ふく
奉仕に動員され戦禍にたおれた学徒と、原爆の犠牲者を含め
た約1万人の学徒の霊を慰めるため建立されました。

めがみぞう
平和の女神像と8羽のハトを配した高さ12mの有田焼の
とうばん
陶板仕上げで、末広りの5層の塔の中心柱に慰霊の灯明
がついている。塔の左右にある4枚のレリーフは「食糧増産
作業」「女子生徒の縫製作業」「工場内での鉄工作业」「広
島の灯ろう流し」を表し、その裏に全国戦没学徒出身校35
1校の校名と動員学徒悼歌“ほのお果てては”が記されてい
ます。

(参考：『碑めぐり解説のしおり』被爆体験証言者交流の
集い 編 広島平和記念資料館啓発課)



動員学徒慰霊塔

かね 平和の鐘

かくへいき
核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとし
て建立されました。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一
人ひとりの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになっ
ています。

かね ぼんしょう じゅうようむけいぶんかざいほじしゃ にんげんこくほう かとりまさひこ
鐘は、梵鐘の分野で重要無形文化財保持者（人間国宝）である香取正彦氏が制
作し、表面には「世界は一つ」を象徴する国境の無い世界地図が浮き彫りにされ
ています。

つきざ げんすいぱく こ
撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原子力のマークがデザインされており、鐘楼
の周囲の池には大賀ハスが植えられています。

ひばく きず おお いた ひばくしゃ れい なぐさ
被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、やけどの痛みをしのいだという被爆者の霊を慰
めたものです。

とうろう流し

げんぱく いっしゆん
原爆は一瞬にして多くの命を奪いまし
た。そして、そくし まぬか
即死を免れてもひどいやけどを
負った人たちが大勢いました。その人たちの
多くは、その熱さと痛み^{いた た}に耐えかねて近くの
川に次々に身を投げ、川面には遺体^{いたい う}が浮き、
川底にも遺体^{いたい しず}が沈んでいたといひます。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中
心部にバラック建ての商店が建ち始めた昭和

23～4年頃、親族や知人^{げんぱく いぞく}を原爆で失った遺族や市民たちが追善^{ついぜん}と供養^{くよう}のため、手
作りの灯籠^{とうろう}を川に流したのが、「とうろう流し」の始まりとされています。

灯籠^{とうろう}には、亡^なくなった方の名前と流した人の名前^{か こ}を書き込むのが一般的ですが、
最近は「平和への思い」が書かれる光景も目立ちます。長い歴史を持つ「とうろう流
し」は、慰霊^{いれい}とピースメッセージの両方の意味を持つようになりました。毎年8月6
日の夕刻に元安橋の上流から流されています。

コロナ禍のため中止されていた自分で川に流すことが再開し、広島訪問2日目を終
えた訪問団10名は、平和施設^{しせつ}見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和
への思い^こを込めて灯籠^{とうろう}を流しました。



元安川を彩る灯籠

(3) 訪問3日目・8月7日(水)

9:00 広島駅発
10:00 世界遺産「いつくしまじんじゃ厳島神社」見学
17:03 広島駅発
20:38 小田原駅着・解散



世界遺産・宮島「厳島神社」を見学

世界遺産「厳島神社」・日本三景「宮島」見学の様子



4 訪問団員（参加者）の声

(1) 訪問前の感想

ア 親の声

●今回で広島を訪れるのは3回目ですが、普通の旅行では体験できない式典への参列、被爆体験の聴講、とうろう流しへの参加など訪問団ならではの貴重な体験をさせていただけることをとても楽しみにしています。そして、同じ思いを持つ訪問団の皆さんと一緒できることも楽しみです。

●私は今の子供たちよりは戦争教育を受けてきたと思っていますが、生まれ育った地域柄空襲の経験談は何度も聞いたことがあったのですが原爆の事は授業で習った程度で。子供たちに教えて行くためにも、自分がその土地に行ってしっかり学んで来ようと思いました。今年の8月で戦後79年、被爆経験者の語り部の方もどんどん少なくなっていると思います。資料などでも学ぶ事は出来ませんが、やはりそれを体験している方のお話はその時の状況をよりリアルにそしてその時の感情も知る事が出来、戦争がどれだけ悲惨で二度としてはいけないもの！という決意と共に心に残ります。今回の語り部の増岡さんは中学3年生の時に被爆されているとしおりに書いてありました。息子と同じくらいの頃の体験なので、その時の家族や友達に対しての気持ちやこの先の未来に対してどのように思ったかなど聴けたら、より息子の心にも残ると思うのでしっかり聴いて来ようと思います。

戦争のことを思う度、日々当たり前のようにある「平和」が本当はどれだけ尊いものなのかをふっと思い出し実感します。今は「平和」は当たり前と思って尊さを感じていない我が子たちが、平和の尊さを学び戦争でつらい思いをした人の気持ちに寄り添える優しさを持てるよう、しっかり教え伝えて行こうと思います。

●日本にいと当たり前に見える「平和」。第二次世界大戦より79年、薄れゆく戦争への恐怖感や危機感のなか、戦争の悲惨さを被爆地の広島で目と耳と肌で感じるにより、今ウクライナやガザなど他国で起きている戦争を自分ごととして娘に感じてほしい、そして世界平和に対して高い視座を持って取り組んでほしいという思いから参加を希望しました。

私自身は平和記念資料館を訪れるのは2回目ですが、数十年経った今の自分の目線から「戦争と平和」を見つめ直したいと思います。また、被爆体験者から直接お話しを

伺える貴重な経験を通して、娘だけではなく自分自身も世界平和に対し何か活動ができないか考えるきっかけを得てきたいと思います。

●2年前に絵画教室を通してウクライナの子供たちと交流する機会があり、昼間でも窓のない薄暗いシェルターで生活をしていることを知りました。戦争によって罪のない多くの人が犠牲になってしまうのは、昔の日本も同様だったと思います。平和な時代に生きている私が原爆や戦争について娘に語るより、実際に平和式典に参列し、被爆された方のお話を聞くことができる「親子ひろしま訪問団」に参加した方が、平和な時代の尊さをより感じてもらえると思い参加しました。

●2年前、子供が小学4年生の時の夏休みの自由研究で、第二次世界大戦について一緒に調べました。私はもっと明るく楽しいテーマを勧めたのですが、子供が興味を持ったのをきっかけに、私自身どちらかという目を見てしまっていた戦争のこと、原爆のこと、今当たり前にある平和な我が国での生活のことなど、改めて考え学ぶ良い機会となると思いました。

特に原爆の被害については子供にとって大変衝撃的だったようで、たまたま原爆投下の日時に行った市立図書館で、館内放送とともに黙祷をしたり、それまでになく自主的にいろいろ学ぼうとしていた子供の姿が印象に残りました。その後、広島の実地見学に行きたい、というようになり、親の私も一度は行きたいと思っていましたが、簡単に連れていける距離ではないのでなかなか実現させられませんでした。そんな折に親子ひろしま訪問団の募集チラシを見て、8月6日の原爆投下の日に合わせて訪問し、記念式典に参加したり被爆者のお話を聞けるという内容に魅力を感じ、子供にとっても私にとっても、とても貴重な経験になると思い応募しました。

イ 子どもの声

●歴史の授業などで、広島原子爆弾のことについて勉強しました。

平和記念式典へ参加できることや、被爆者の方からのお話を聞くなどといったとても貴重な体験をするのがとても楽しみです。小学生のときから、原子爆弾や平和について興味があったのですごく嬉しいです。

●学校の授業で戦争のことは習いましたが、戦争＝空襲くらいのことしか分かってなく実は戦争の細かいことは分かっていませんでした。昔戦争をして悲惨だったからもう戦争はしてはいけないから法律で戦争しないと決めた。だから日本は戦争しないと思ってました。なので正直、原爆のことも授業で習ったなんとなくでしか知りませんでした。今回のこの機会に母が戦争について学んでほしいと言い、自分も少しは関心があったので参加してみたいと思いました。

母が何も知らないと思った時にショックを受けると思うからと「はだしのゲン」を借りてきてくれて読みましたが、思っていた以上の内容にショックを受けました。でも、もっと知りたいとも思いました。広島に行ったら、もっとショックかもしれませんがしっかり見たり聞いたりして学んで来たいと思います。

●私は、昨年読んだ特攻隊の方と少女の恋愛小説を読んで、戦争について興味を持ちました。その話を父に伝えると、「靖国神社」の話を教えてくれて、家族で靖国神社に行きました。そこで戦争の資料に触れ、もっと知りたいと思うようになりました。

その後、Youtubeで戦争の動画を見るようになり、ある時、銃弾で穴が開いた少年の服の動画を見つけ、その話を母に伝えると、広島「平和記念資料館」にはそういった展示が他にもあるよ、と教えてくれました。そこで、広島に行ってみたくて思いましたが、遠いところなので無理かなと諦めていたところに「親子ひろしま訪問団」のチラシが学校で配られ、その存在を知り、今回の応募につながりました。

●広島に落とされた原子爆弾でどのくらいの被害があったのか知りたいです。教科書や本でしか見たことのない原爆ドームに行ってみたくて。ウクライナでは私より小さな子供たちが親と離れて生活していると知りました。少しでも元気になって欲しくて、シェルターの壁に飾る絵を描いてプレゼントをしました。

自分にもできることがあると分かって嬉しかったです。どうやったら戦争が終わるのかは分からないけど、早く子供たちが外で自由に遊べるようになってほしいです。

●4年生の自由研究で戦争のことを調べて興味を持ったからです。被爆者の方のお話を聞く機会はなかなかないし、友達が参加した時の感想を聞き、とても良い経験になったと教えてくれたので参加したいと思いました。平和祈念資料館でいろいろ見るのが楽しみです。

(2) 訪問後の感想

ア 保護者の声

●訪問団として参加させていただいたことに感謝します。今現在広島に感心を持った方々と同じ思いを持って訪問できたことはとても貴重な体験でした。また、数年後皆で会って平和について語り合いたいです。

「百聞は一見にしかず」というように、テレビで見るのとは全く違い現地で感じ聞く話は、心に刺さることだらけでした。本当は多くの方に広島を訪れそれぞれ感じてほしいとは思いますが、それは難しいのでまずは戦争があったこと、原爆が落とされた事実、被爆者が今も苦しい気持ちを抱え力強く生きていることをピースキャンドルナイトを通して知ってほしいです。私は身近な人に、友人に話しをすることから始めたいと思います。

●私自身、学徒動員中に被爆し亡くなった子供たちと同じくらいの子供を持つ母親なので、その子たちの母親の気持ちを考えるといたたまれない気持ちになりました。被爆体験者の方が、自身がさまよってるときに「水」という言葉と「お母さん」という言葉が多く聞こえたと言ってらっしゃいました。被爆体験者の方自身も母親を原爆で亡くされ、それを伝えに来た姉が居なくなってから悲しくて泣いたそうです。「やはり母親というのは特別なんです」とおっしゃられた時は私自身も涙が出そうになりました。親にとっては子を、子にとっては親を亡くすことは悲劇です。こんな悲劇を沢山起こす戦争は起こっては絶対にいけないと強く思いました。子供たちと日々笑顔で過ごせる平和がどれだけありがたいことか、この活動を通して学ばせていただきました。このことをまずは自分の子供たちに、そして周りにも伝えていけたらいいなと思います。

●原爆が投下された同日同時刻にその場にいることで、より自分ごととして原爆について考えることができた。先ほどまでの日常が突然奪われ非現実的な世界へと変貌した町を視覚、聴覚、嗅覚、触覚がどのように受け止めたかを考えたら身がすくんだ。戦争を実際に経験された方々が高齢になって行くにつれ、戦争への恐怖心も薄れていっているように思う。今回の訪問で自分が感じたたった一発の原爆が引き起こした惨状をできるだけ多くの人に語って、また広島平和記念公園に足を運んでもらえるよう伝えていきたいと思います。

●増岡さんがおっしゃったように、相手を思いやる気持ちが一番大切なんだと改めて感じました。そして、自分の行動や発言がもたらす少し先の未来を想像する力を子供たちには養って欲しいと強く感じました。今の日本の平和が続いているのは、79年前に無念の中亡くなられた方々・今も後遺症に苦しみながら戦争の悲惨さを訴え続けて下さっている方々の想いの上に成り立っていることを子供たちと共に感謝して生きていきたいと思います。

●被爆体験者の方のお話の中で、戦争をなくすためには戦争を好む政治家を国会に送らない、というのがありました。今まで政治に全く無関心でしたが、恐ろしい戦争の惨事を繰り返さないために、一人一人の意識で国を変えていかなければならないと思いました。また、政治的な権限がない市民の立場でも、日常生活で相手を気遣う、言葉を大切に使うという基本的なことを、改めて考え直しました。
今一度子供とも良く話し合い、今後の生活で気を付けていきたいと思っています。

イ 子どもの声

●周りの友達や、先生、多くの人に広島で経験したことを話したいです。日本人はもちろん、外国人の方にも、この悲惨な出来事を知り、関心を持ってもらいたいです。なので、中学生英語スピーチコンテストで世界平和についてスピーチをするので、より一層、力を入れようという気持ちが高まりました。それに加えて学校でこの経験してきたことを話したいです。はだの平和の日のつとだけでの報告だけでは勿体ないです。1人でも多くの人が1945年8月6日広島に原子爆弾が投下された。これだけでもいい。このたった一発の原子爆弾によって、とても多くの人が苦しんでいます。

原子爆弾によって生きたくても生きることができなかった人々のためにも今を全力で生きていこうと思います。当たり前の日常が当たり前ではなく特別なものと分かりました。毎日、安心安全に暮らせていることに感謝し今を全力で楽しんで暮らしていこうと思います。

●平和記念資料館で見た写真の数々はどれも生々しく、とても悲惨で思っていた以上にショックでした。被爆体験者の増岡さんが、今の水素爆弾はこの頃の前爆の1000倍の威力があって3つで日本がダメになると言っていました。核兵器がどんなものでそれが使われたらどうになってしまうのか。その上で、絶対に使ってはいけないし使うような状況の戦争自体をしてはいけないと思いました。増岡さんは、戦争をしないためには相手を思いやる気持ちが必要だと言っていました。増岡さんが教えてくれたことやこの広島訪問団で僕が学んできたことを妹たちや友達に話していけたらと思います。

●今回の訪問で前爆による被害を具体的に知れたから、学校の給食の時間や社会の時間のときに、戦争や前爆の話が出たら前爆の残酷さを知ってもらうため、今回のこととそれに対する自分の思いを伝えたいと思いました。8月17日の「はだの平和の日のつどい」の発表のとき、被爆者体験聴講のことをしっかりと言葉にして発表しようと思いました。また秦野で戦争や前爆に関するイベントがあったら参加してみたいと思いました。

●平和な世界を作るためにまず自分のできる範囲で行動を実行しようと思います。学校や姉・兄と意見の食い違いが起きたときはただケンカするのではなく、その人とじっくり話し合おうと思います。それでも仲直りができなかつたら周りの人にも相談して、

何度も何回でも話をしたいと思います。自分と意見が違うことも受け入れられるように色々な人の考え方を学んでいきたいです。

●今回の訪問で知ったことを忘れずに、戦争を二度としない平和な日本になるように、もちろん日本だけではなく世界中が平和になるように、自分にできることを探したいです。そして、家族や友達にも平和について考えてもらえるように、学んだ事を伝えられたらいいと思いました。

5 訪問団規約

(名 称)

第1条 この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

(目 的)

第2条 訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

(事 業)

第3条 訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。
- (2) 平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。
- (3) 原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を受けながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。
- (4) その他目的を達成するために必要な事業。

(組 織)

第4条 訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子5組10人により組織する。

- 2 訪問団に、団長、副団長、会計、監事及び記録を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。
- 3 団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。
- 4 副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。
- 5 記録は、訪問団の事業を記録するものとする。
- 6 会計は、訪問団の経理を処理するものとする。
- 7 監事は、会計を監査するものとする。
- 8 訪問団の事務局は、秦野市役所平和主管課に置く。

(解 散)

第5条 訪問団は、第2条の目的を達成したときに解散するものとする。

(経 費)

第6条 訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

(その他)

第7条 この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附 則

この規約は、平成7年6月15日から施行する。

この規約は、平成28年4月1日から施行する。

この規約は、平成31年4月1日から施行する。

Ⅱ はだの平和の日のつどい

訪問を終え、秦野の地へ帰った親子ひろしま訪問団は、8月17日（土）にメタックス体育館はだの（総合体育館）サブアリーナにて「平和の日事業」として開催された「はだの平和の日のつどい」で、来場した200名を超える観客を前に訪問の活動報告を行いました。彼らが肌で感じ、学んできた、その生の声は、会場の市民の心にも深く刻まれました。

質疑応答では、市長から一番印象に残ったことは何か、と子どもたちに質問しました。子どもたちは、平和記念資料館の見学で、やけどの写真や当時来ていた服などを見て心が痛んだこと、原爆の悲惨さ、残酷さを学べたなどと答え戦争を二度としない平和な日本になるよう自分でできることを探したいと話しました。

また実行委員長からは親御さんに親子で話し合ったこと、参加前と参加後のお子さんの変化について質問しました。親御さんは、まず親子で話し合ったこととして、増岡さんの“相手を思いやる気持ちをもつ”という言葉から、家族でどう気持ちよく過ごすかと考えるようになったことなどをお話いただきました。お子さんの変化については、子どもがテレビで戦争関係の番組を熱心に見るようになった、夏休みの宿題に原爆や戦争の恐ろしさや悲惨さを広めるために取り組んだことをお話いただきました。

なお、今年度の「はだの平和のつどい」では、公募市民3団体によるコンサートも行われました。



Ⅲ 被爆アオギリ二世の植樹

9～11月には訪問時に受け取った被爆アオギリ二世の苗木を団員が通学する学校に植樹をしました。その際、団員から活動報告や被爆アオギリ二世について、クラスの友達や全校児童生徒などに発表しました。この活動を通して、より多くの人に平和や命の大切さを伝えることができました。



Ⅳ 資 料

1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限らない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

- 1 平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。
- 1 きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。
- 1 健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。
- 1 市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。
- 1 みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和44年10月1日に制定したものです。

◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限らない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和61年3月27日制定

◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日 毎年8月15日

平成20年6月9日制定

2 広島市平和宣言^{せんげん}

皆さん、自国の安全保障のためには核戦力の強化が必要だという考え方をどう思われますか。また、他国より優位に立ち続けるために繰り広げられている軍備拡大競争についてどう思いますか。ロシアによるウクライナ侵攻の長期化やイスラエル・パレスチナ情勢の悪化により、罪もない多くの人々の命や日常生活が奪われています。こうした世界情勢は、国家間の疑心暗鬼をますます深め、世論において、国際問題を解決するためには拒否すべき武力に頼らざるを得ないという考えが強まっていないでしょうか。こうした状況の中で市民社会の安全・安心を保つことができますか。不可能ではないでしょうか。

平和記念資料館を通して望む原爆死没者慰霊碑、そこで祈りを捧げる人々の視線の先にある原爆ドーム、これらを南北の軸線上に配置したここ平和記念公園は、施行から今日で75年を迎える広島平和記念都市建設法を基に、広島市民を始めとする平和を願う多くの人々によって創られ、犠牲者を慰霊し、平和を思い、語り合い、誓い合う場となっています。

戦後、我が国が平和憲法をないがしろにし、軍備の増強に注力していたとしたら、現在の平和都市広島は実現していなかったのです。この地に立てば、平和を愛する世界中の人々の公正と信義を信頼し、再び戦争の惨禍が起こることのないようにするという先人の決意を感じることができるはずです。

また、そうした決意の下でヒロシマの心を発信し続けた被爆者がいました。「私たちは、いまこそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければなりません。」これは、全身焼けただれた母親のそばで、皮膚がむけて赤身が出ている赤ん坊、内臓が破裂して地面に出ている死体…生き地獄さながらの光景を目の当たりにした当時14歳の男性の平和への願いです。

1989年、民主化に向けた市民運動の高まりによって、東西冷戦の象徴だったベルリンの壁が崩壊しました。かつてゴルバチョフ元大統領は、「われわれには平和が必要であり、軍備競争を停止し、核の恐怖を止め、核兵器を根絶し、地域紛争の政治的解決を執拗に追求する」という決意を表明し、レーガン元大統領との対話を行うことで共に冷戦を終結に導き、米ソ間の戦略兵器削減条約の締結を実現しました。このことは、為政者が断固とした決意で対話をするならば、危機的な状況を打破できることを示しています。

皆さん、混迷を極めている世界情勢をただ悲観するのではなく、こうした先人たちと同様に決意し、希望を胸に心を一つにして行動を起こしましょう。そうすれば、核抑止力に依存する為政者に政策転換を促すことができるはずです。必ずできます。

争いを生み出す疑心暗鬼を消し去るために、今こそ市民社会が起こすべき行動は、他者を思いやる気持ちを持って交流し対話することで「信頼の輪」を育み、日常生活の中で実感できる「安心の輪」を、国境を越えて広めていくことです。そこで重要になるのは、音楽や美術、スポーツなどを通じた交流によって他者の経験や価値観を共有し、共感し合うことです。こうした活動を通じて「平和文化」を共有できる世界を創っていきましょう。特に次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと「友好の輪」を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、「希望の輪」を広げていただきたい。広島市は、世界166か国・地域の8,400を超える平和首長会議の加盟都市と共に、市民社会の行動を後押しし、平和意識の醸成に一層取り組んでいきます。

昨年度、平和記念資料館には世界中から過去最多となる約198万人の人が訪れました。これは、かつてないほど、被爆地広島への関心、平和への意識が高まっていることの証しとも言えます。世界の為政者には、広島を訪れ、そうした市民社会の思いを共有していただきたい。そして、被爆の実相を深く理解し、被爆者の「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」という平和への願いを受け止め、核兵器廃絶へのゆるぎない決意を、この地から発信していただきたい。

NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議が過去2回続けて最終文書を採択できなかったことは、各国の核兵器を巡る考え方に大きな隔たりがあるという厳しい現実を突き付けています。同条約を国際的な核軍縮・不拡散体制の磁石として重視する日本政府には、各国が立場を超えて建設的な対話を重ね、信頼関係を築くことができるよう強いリーダーシップを発揮していただきたい。さらに、核兵器のない世界の実現に向けた現実的な取組として、まずは来年3月に開催される核兵器禁止条約の第3回締約国会議にオブザーバー参加し、一刻も早く締約国となっていきたい。また、平均85歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆79周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げる

とともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、改めて被爆者の懸命な努力を受け止め、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。皆さん、希望を胸に、広島と共に明日の平和への一歩を踏み出しましょう。

令和6年（2024年）8月6日

広島市長 まつい 松井 かずみ 一實

3 (広島) こども代表「平和への^{ちか}誓い」

目を閉じて想像してください。

緑豊かで美しいまち。人でにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。

79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和20年(1945年)8月6日 午前8時15分。

「ドーン!」という鼓膜が破れるほどの大きな音。

立ち昇る黒味がかった朱色の雲。

人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。

ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。

原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。

言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、79年経った今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。

今もなお、世界では戦争が続いています。

79年前と同じように、生きたくても生きることができなかった人たち、

明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。

本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。

色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。

「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。

仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。

私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。

平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。

そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和6年(2024年)8月6日

こども代表 広島市立祇園小学校

6年 加藤 晶

広島市立八幡東小学校

6年 石丸 優斗



令和6年度
親子ひろしま訪問団
訪問の記録

編集発行 秦野市文化スポーツ部文化振興課
〒257-8501 秦野市桜町1-3-2
TEL 0463-86-6309